

第4回文化芸術推進計画検討協議会振り返りシート

軽微な修正（ニュアンス・語句など）

視点の追加：背景、基本理念（前文・キーワード）、アーカイブ化、食文化

今後検討（保留）

項目	内容
計画のネーミング	
計画のネーミング	○芸術・文化は五感の中の「視覚」「聴覚」「触覚（触れる・体験する）」に通じることを考えると、「見てみる」、「聞いてみる」、「やってみる」が3つ「みる」がキーワードではないかと思った。これら三つの感覚は、劇場での演劇鑑賞、音楽鑑賞、ダンスやワークショップなど、多様な文化体験に共通しているのでキーワードとして検討してはどうか。 ○ユニバーサルデザイン的な考え方をすると、「見る」は視覚偏重、「聞く」は聴覚偏重になってしまうので、言い換えをするならば「つながる」ということではないか。文化それぞれ多様性の中で「つながる」、「はぐくむ」ことになるので、この2つの言葉（「つながる」「はぐくむ」）がキーワードになるのではないか。 ○「つながる」というキーワードは重要だと思った。愛称については、府中市市民協働の推進に関する条例が令和7年に施行されて、通称の「協働しよう。そしよう」は公募制で市民の意見を反映され作文されている。この名称としたことで自分事に思ってくれる人もいて、この計画で愛称もどうなるかは気になった。 ○2024年に実施された「FUCHU Next 100 Years（けやき並木100周年）」では、市内在住・在学の中学生を対象にマークとキャッチコピーを公募したところ760の応募があった。その後、選考委員会でインターネット投票を行い、その時の参加者が4,030人だった。このように、ネーミングは、市民に参加してもらい納得してもらうように投票で決めていくのも一つのやり方ではないか ○どこのタイミングでネーミングを決めるかによって、やり方を考えていく必要があると思う。 ○、個人的にはネーミングは「つながる」、「はぐくむ」が良いと思うが、「キーワード」が3つ並んでいたほうがかっこよくおさまりがよいと思う
第1章	
1. 策定の背景	○新しい市民と昔から住んでいる市民との融合の中で府中文化が形成されていくことは40年前も今も課題としてあると感じた。文化施設とかの歴史的背景の文言がある中で、外国人も含めた新しい住民とともにということを強調したほうがよいのではないか。

項目	内容
2. 文化芸術を取り巻く動向	○国や東京都の動向だけでなく、府中市の動向を明記すべきである ○府中市の動向について事務局で考えたものが、「今回の策定の背景」の部分である。その部分に関していえば、「地域文化の力が落ちている」という書き方はしたくないが、地域の現状がどうなっているかを記載する必要はある。先ほどの新住民や旧住民の隔たりや、地域の文化度が今どうなっているか、今後どうしていくかの視点が重要 ○「福祉の文化」の視点も重要ではないか。府中市において、「文化」という名称がついている施設は地域の文化センターしかないと認識している。今後、立派な生涯学習センターがなくなることと想定すると、あらかじめ府中市の動向として、地域活性化について触れ、「福祉文化」という新しい言葉を入れてもよいのではないかと考えている
3. 計画の位置づけ	○「その他の分野別計画との整合を図りながら」という記載されているが、具体的には、観光と景観と文化財の計画などがなる。観光振興プランや景観計画は策定済みで、ケヤキ並木の保護活用計画は今年度策定予定である ○関連して府中市では令和4年に府中市DX推進基本方針が策定されており、その中に示されているコンセプトを本計画にも活かせるのではないかと考えている
5. 計画策定の体制	○地域文化の活性化、監視機関の有効活用などビジョン実現のための行動指針などを記載したほうがよいのではないかと。そして、成功するためにはあきらめず続けていくことだと思うので、PDCAサイクルを回すために監視機関の役割は重要である。今はPDCAが回っていないように感じる。計画でも監視する組織名を入れるべきではないか。文化芸術推進計画と総合計画の計画期間は異なっていることから、上位計画やコロナ渦などで考え方が変わることがある。そのタイミングでPDCAを回していくことが重要ではないか ○現在は庁内で自己評価的に行っているが、それを外部や市民と共有し、意見交換できる場を設けるほうがよい
6. 計画における文化・芸術の範囲	○最後にある「誰一人取り残さない文化を通じた協働」の文言について、ひっかかる。国連のSDGsでよく使われる表現ではあるが、この言い方では、自分が取り残されない側にいる印象を受ける。むしろ、「誰一人取り残されない社会」という表現のほうがよいのではないかと。 ○細かいことだが、骨子案にある広義の捉え方の部分、「文化を通じて協働する」の表現は「協働すること」そのものが目的になっているようで違和感を持った。「協働することで文化が広がっていく」とか多様な主体が交わっていくことなので文化の広がりがもう少し見えるとよい ○広義の考え方の「文化を通じて誰一人取り残さない。文化を通じて協働する」について、個人個人でいろいろな形で文化を育んでいくことになるので「協働することで文化が醸成する」としたほうが良い ○「醸成」というキーワードは熟していく感じがしてよいと感じた。協働することによって文化が〇〇になるという書き方のほうが良い。

項目	内容
	委員の指摘にあったような「醸成する」、「はぐくまれる」などいくつか考えていく必要がある
第3章 1. 基本理念	
全体	○事務局説明を前文的にそのまま書けばよいのではないか。法律の前文のように、この基本理念を理解してもらうための説明文があったほうが良いのではないか。この「多様性を認め合い 人と文化が磨かれるまち」だと唐突感があるので、今の事務局説明がわかりやすかったなのでそのまま入れてはどうかと思っている。 ※事務局説明：「多様性を認め合い、人と文化が磨かれるまち」は基本理念として仮置きしている状況で、この基本理念に盛り込まれる視点として委員の皆様からいただいた意見をもとにキーワードとして仮に配置している。人は多様な側面を持っていること、文化・芸術が人の生活に潤いを与えたり、活力になっていくもの（文化芸術は優先度が低いものとして取り扱われていたがコロナ禍を契機に明らかとなった）、文化そのものが様々な課題の解決につながるような創造性を持っていること、文化が多様な主体をつなぎ合わせる可能性を持っていること、文化によって幸福度が高まること、など委員の発言を踏まえたものとなっている。最終的にこのキーワードを残すかは計画の作り方次第と認識している。 ○理念としてはこれで十分である。ただし、市民にとってわかりやすく伝えるためには工夫が必要だ。たとえば資料4の理念の左上、「人は多様な側面を持っている」という文言は、そのままでは「当たり前だ」と受け止められる可能性がある。「府中市の人は多様な側面を持っているので、こうあるべきである」とか、「多様な側面を持つ者としてこういう方向性を追求する」といったようにすべきではないか。「社会課題に立ち向かう文化を追求し続ける」「文化が創造性を広げることが重要」など、行動や意思を感じさせる表現が必要ではないか。 ○3 ページの基本理念について、「多様性を認め合い、人と文化が磨かれるまち」という文言に違和感を持った。例えば、「多様性を尊重し合い、人と文化が響き合う街」とかにした方が柔らかい表現になるのではないか。 ○文化を知っている人に対して、社会や人生におけるさまざまな問題を文化の側面から解決できることを知ってもらい、参画してもらうことが重要ではないか。そのことをより府中市民に伝えていくためにも、主体となる市民や企業の方をイメージして作文すると多様性のところの文章もよりよくなるのではないか。 ○府中市の文化・芸術が独り歩きするのではなく文化・芸術を通じて、つながりや交流が生まれること、多様性が伝わること、子どもたちを含めたこれから文化芸術に携わっていく可能性がある人たちについて書かれていることが大事だと思った

項目	内容
	○他のキーワードの「多様な」という語が複数回使われていることが気になった。1つ目と4つ目の文言は、人が多様な側面を持ち、主体的に関わるという視点で重なっており、統合できる可能性がある
疾病や自然災害、社会課題に立ち向かう文化	○基本理念の「疫病や自然災害、社会課題に立ち向かう文化」という文言について、コロナ禍が文化芸術活動に深刻な影響を与えた中でも、一時の停滞の時期を経つつ、それでも立ち止まらず動いて元に戻りつつある現状を感じ、文化芸術というものの強さを感じ取ることが出来た。 ○基本理念の「疫病や自然災害、社会課題に立ち向かう文化」という表現について違和感を持った。これだけが「～文化」と終わっている点で、他の表現と調和しておらず、やや浮いているように見える。 ○ここだけ「文化」で終わっていることは気になる。また、「立ち向かう」という言葉が、負けないでよみがえって発展することをうまく言えたらよい。 ○社会課題に立ち向かう文化を解決するためには、「自助・共助・公助」の視点が重要ではないか。 ○「疫病や自然災害、社会課題に立ち向かう文化」という表現に関しては、ここだけ「～文化」になっているため、削除するなどして他の書き方にそろえたほうがよい。自助・共助的な意味で、文化が武器になって社会課題に立ち向かっていくという理解もできるが、文化自体が決して疫病や自然災害などによって損なわれるものではない力があるという点を強調したい。 ○「疫病や自然災害、社会課題に立ち向かう文化」という文言の位置づけに違和感がある。この表現は、より下位のところに入れていってもよいのではないか
文化があることで幸福度が高まる	○3ページの基本理念にある「文化があることで幸福度が高まる」という表現には違和感がある。日本の幸福度は国際的に低く、年齢とともに幸福度が感じなくなってくることや経済的状況など様々な要因が影響する。例えば、「文化があることで心の豊かさを育む」、「文化があることで豊かな人間性を養う」、「文化があることで幸福感が高まる」などとしてはどうか ○「幸福度」についても、言葉としてはよいが、どんな指標で測るのかは曖昧で、具体的に何をめざすかという視点では、ぼんやりしている印象を受けた。 ○「幸福度」は気になっているが、文化が幸福につながるという意味で、ここで記載されているのは良いと思っている。文化と幸福感の結びつきを知ってもらうことも重要だと思う。確かに「幸福度」という言葉は気になるのでもう少し表現を考えていく必要がある。 ○「幸福度」という表現も、指標としての「度」よりも、「幸福感」や「文化があることで幸せを感じる」といった、より柔らかい言い回しの方がふさわしいのではないか

項目	内容
	○みなさん文化の価値がわからないのではなく、時々ほっとしたりしては感じていると思う。それを文化だということをわかってほしい ○「幸福度」という言葉については、「豊かさ」という表現にしてもよいのではないか。 ○「幸福度」の表現については、「心の潤いを育む文化」とかにしてはどうだろうか ○ウェルビーイングのほうが包括的な言葉でよいのではないか。 ○先ほども福祉の話が出ていたが、ウェルビーイングは福祉的な考え方を含んでいるように思える。
第3章 2. 基本施策及び施策の方向性	
基本施策	○タイトルや、基本施策のキーワードなど「受け継ぐ・つくるのほかに「知る」がなくてよいのか。 ○計画推進のところで落とし込んでいくこともできると思うが、基本施策の中でも、今あるものを受け継いでいくという視点も記載できるとよいのではないか。 ○文化芸術の素晴らしさに、ひとりでも多くの人が気づいてほしく、芸術・文化を体験できる場所に行って・触れてほしいと思っている。初回のアンケートで、裾野を広げていくきっかけがないという結果が出ていた。これまで、「きっかけづくり」について繰り返し議論されていたので、このことはキーポイントになってくるのではないか
めざす姿	○基本施策1のめざす姿の「主体的に活動しています」の表現が気になった。さまざまな文化や芸術に触れて、差別的な意識をなくすことができるなど踏み込んで記載すべきかわからないが、最後の言葉はこれでよいだろうか。「多様性を認め合い、人と文化が磨かれるまちを目指す」のであれば、実際には多様性を認め合っていないところもあるので、少なくとも府中市からは差別的なことがなくなっていくことが述語的に入っていてもよいのではないか。府中市にどれだけ外国の方がいるかはわからないが、下の説明では積極的な表現で書かれていてもよいのではないか。かといって、「差別をなくす」みたいな表現は、あまりにも文化に離れているように見えるので考える必要がある。 ○「めざす姿」については、「気軽に」ではなく「身近に」の方がより文脈に合う表現であると感じた。 ○「つながる」の項目で、「自分らしく関わることができる」という表現に少し違和感を覚えた。「自分らしく」という言葉がどういう状態を指すのか、自身の経験からも即座にしっくりこなかったため、気になった
施策の方向性 【基本施策1】	○「市民に身近な文化センターの魅力向上」という表現について、本当に「身近」と思われているかは疑問である。「時代に応じた既存施設の機能強化」などといった、時代に応じて今ある既存施設の機能を高めて活用していく表現にするとすべてが含まれるのではないか

項目	内容
	○情報発信についても、紙・ウェブ媒体のほかにSNSも入ってくるのではないかと。特に、紙媒体はかっこ書きでも「広報誌」など具体的な内容も入れておいたほうがよいのではないかと
施策の方向性 【基本施策3】	【文化資源のアーカイブ化の実施】 ○必要な人たちに情報が届くことや、やってきた取組をどのようにアーカイブしていくかという視点が、全体通して見えづらい。アーカイブが他の分野につながっていったような見え方にできないか。 ○情報収集やアーカイブは全体に関わることなので、基本理念みたいなものとして、様々な施策を考えていく上での前提として置かれているほうが良い ○最終的な計画推進に向けて、どのように市民に分かりやすく伝えていくかが課題。基本理念の各項目に実際の業務として取り組む人たちにとっても、全体にまたがるような基本理念があれば皆が同じ向きを向いてやっていかないといけないことがわかる ○今、やっている取組もアーカイブになり得る。これをどうやって残していくかを横軸の考え方で捉えていくのが良い ○基本施策3にある「文化資源のアーカイブ化」について、横ぐしとしては、歴史を正しく伝承して未来につなげていくことが大事なことを考えると「クロニクル」のほうが良いのではないかと。府中で行われているさまざまな会での活動や団体の活動について記録することで、活動の評価や改善も改めて見つけられるのではないかと。また、観光の側面からも記録があることで、地域振興としても貢献できるのではないかと。「クロニクル」として、府中の記憶を残して未来に伝承することで、住民の意識が向上し、まちが活性化し、質も高められると思った ○アーカイブはどの分野でも保存していくことを念頭に置いて考えていくことが重要ではないかと。SNSのインスタグラムなどで発信された内容も1つの気軽なアーカイブの形ではないかと。文化は数値上、わかりやすく結果が見えてくるのは難しいと認識している。だからこそ、今は何の価値があるかわからないことでも蓄積していくことで、次回の計画策定時など後で振り返り・評価することができるのではないかと ○日常的なイベントや活動などは記憶として残らないことがある。そうしたものは、文化の発展や意識改革につながっているのに、振り返ったりクロニクル化したりするときに根拠となる情報がないのが文化領域の特色ではないかと。一方で、まちづくりやアートプロジェクトをやっている人たちは積極的に取組を事細かに書き残すことをしている。そのようなことをやっておかなければ、後で気が付いたときに何も根拠となるものがなくなってしまうので、この分野もアーカイブするべきという潮流がある。自治体史は、行政、議会、市長の話が多く、文化については自治体主導のイベントがほとんどで、市民の文化活動が描かれていない。他自治体では、文化を市史に書き起こして

項目	内容
	いくために参加型で市史を作っている。アーカイブ的なものがないと市史にも書けない。消えていくものを何等かの形で残しておく必要はあると思う。 【その他】 ○3ページの「パブリックアートの活用」という項目について、成城大学の学生が府中のパブリックアートに関する論文（「パブリックアートの管理・保存・啓発活動」）をまとめている、美術館副館長へのインタビューも掲載されているので参考にしてハードからソフトの取組を記載できるのではないかな。
施策の方向性 【基本施策4】	○「多様性のある共生社会」という表現については、「多様性のある」と「共生社会」という二つの意味が重複してしまう。そのため、「多様性を尊重する共生社会」とするべきではないかな。
その他	
	【食文化について】 ○地域によって食文化が違うことが注目されているので、食文化について取り扱わなくてよいかは確認が必要。 ○新たな府中市史では食文化について細かく描かれているので参考にできるのではないかな。 【その他】 ○府中の文化芸術活動を「金太郎飴」のように捉えている。その棒状の飴を切ると断面には必ず金太郎が見えることをイメージしている。 「けやき音楽祭 JAZZ in FUCHU」は4万人の来場者数だったが、これも府中市の取組みの1つではないかな。そうした大規模なものから小さな地域活動までを、たとえば、アートカルチャーなので「アートカル」として共通のキャッチフレーズやマークを使って、どんな活動でも府中市の取組の一つであることを繰り返し伝えながら認知させていくとよいのではないかな ○自治体は、良いキャラクターやロゴをずっと使い続けて、価値を普及していくことも大切だと思う。頻繁に変えてしてしまうことで効果がでないこともあるので、重要な意見 ○「JAZZ in FUCHU」は、他の主体によるものであるが非常に良い活動なので計画に記載していただきたい。また、けやき並木でのイベント「キテキテ府中」も、ステージプログラムや民間企業による飲食店などの出店などを通じて、交流と賑わいを生み出しており、文化的な役割を果たしている。また、性質は少し異なるが、競馬場で実施される花火大会では音楽とのコラボレーションも行われており、非常に興味深い企画である。こうした活動も計画に記載できないかな。